忍界の蟲愛づる少女

幻籠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忍界の蟲愛づる少女

【Ｎコード】

Ｎ５６８０Ｎ

【作者名】

幻籠

【あらすじ】

ＮＡＲＵＴＯ二次創作小説、原作介入ものです。現代世界での一生を終えた少女の願いが何故か叶ってしまい、ＮＡＲＵＴＯ世界のモブ（？）キャラに憑依転生してしまう物語です。

第零話（前書き）

クリックしてくれてどうも有難うございます。あらすじを読んで大丈夫なようでしたら、拙い小説ですが読んでいって下さい。
誤字・脱字・表現の間違い等、御指摘大歓迎です。

第零話

か細い呼吸音だけが、静かな深夜の病室に寂しく響いている。

ベッドに独り横たわる少女は、自らの命の灯火が消えようとしている事を、誰よりも理解していた。

既にナースコールを押す力さえも、自分の身体には残ってはいない。

思い起こせば、幼い頃からたったの一度も自由であった事のない身体。

決して長いとは言えない人生の殆んどを病院で過ごし、ベッドに縫い付けられている様な日々を送ってきた。

年相応の子供の様に、外を駆け回るといった経験さえ、この少女には無かったのだった。

いつ死んでもおかしくない、そう言われ続けた不治の病。ずっと身体を蝕む病と闘い続けてきた少女は、この時遂に限界に達しようとしていた。

（あぁ…　意識が途切れる…）

今まで何度も危険な病状になった事のある少女なりに、自分の死期については常に覚悟を決めていたつもりだった。

けれど実際は、いざ瀬戸際に立たされると、脳裏に浮かぶのは後悔ばかり。

大切な家族やお世話になった病院の人達に、最後にもう一言でいいから感謝の気持ちを伝えたい。

そう少女が願っても、命の灯火はすうっと音も立てずに小さくなってゆく。

（もし、輪廻転生というのがあるのならば…）

突然、病院を襲った停電と同時に、少女の意識は闇へ落ちた。
もう、静かな病室には何の音も響かない。

慌ただしい一夜が明けて、漸く病室の点検に来た看護士が見つけたのは、冷たくなった少女の身体だった。

第零話（後書き）

次の話からＮＡＲＵＴＯ世界での話になりますが、憑依転生したモブ（？）キャラの名前が出るのはまだまだ先になりそうです。
また、そのモブ（？）キャラの過去捏造が話の内容になりますので、読む際にご注意下さい。

第一話（前書き）

この話からしばらく、憑依先のキャラの捏造過去話になります。
自分なりに視点の切り替えについて工夫したつもりですが、分かりにくいようでしたら意見をお願いします。

第一話

ドウドウと水の流れる音が耳に届き、途端に少女の意識は覚醒し始める。

（なんだろう、身体が暖かい…。私、生きているの…？）

少女は自分が置かれている状態を確かめる為に、薄ぼんやりとした意識のまま、身体を動かそうと試みる。
しかし何か圧倒的な力に押さえ込まれて、身じろぎする程度に留まってしまう。

（生まれ変わって誰かのお腹の中…とか？…でも、違う。水の音は外から聞こえて、私を包んでいる暖かいものは水ではない…かな？）

訳が分からなくなってしまった少女は、もう一度現状を確かめる為に身体を動かしてみようとする。
押さえ付ける力に逆らって暫くもがいていると、唐突に瞼の向こう側に光が溢れた。少女は驚き、慌てて閉じていた目を開こうとするが、身体の自由がきかず外を見る事は叶わない。

（あぁ、せっかく外に出れたみたいなのに、なんで目が開かないんだろう…。でも、何だろう？この、顔に何かあたる感覚がするのは…これは、風？）

ドウドウと滝が水打つ音が響く森を、一人の女性が走っていた。彼女が走るのは山頂へと続く獣道で、平坦とは程遠い荒れ具合だった。道の上には幾重にも草が生い茂り、普通ならば掻き分けながらでないと進む事は出来ないだろう。しかし、両手でしっかりと胸の前に白い包みを掻き抱いた女性は、生い茂った葉や枝で身体中が傷付く事も厭わずに、全速力で獣道を駆けていく。何度も後ろを振り返りながら走る彼女の表情は、何かに追われているかのように恐怖に満ちていた。

「…大丈夫っ、きっと、間に合う、わっ…」

恐怖を打ち払う為、彼女は自らを励ます言葉を荒い息の隙間から呟く。

その言葉に反応したかの様に、突然、女性が抱いていた包みがモゾモゾと動いた。自分が知らない間に植物に当たって傷付いてしまったのかもしれない。咄嗟にそう危惧した女性は、道が比較的穏やかな場所まで来て、腕の中の包みを確認する。

「良かった、大丈夫、ね…。この子の事もっ、気をつけないと…」

速度を落とさず走り続ける彼女の胸の前で、再び包みがモゾモゾと動き出す。そうして布を掻き分けて隙間から顔を覗かせたのは、まだ生まれて間もない赤子だった。

瞼の向こう側の光と、頬を撫でる風が煩わしい。しかし、少女は今

自分が置かれている状況を確かめたくて、不自由な身体で必死にもがいていた。
何かの中にいた時には分からなかったが外に顔を出してみると、水音以外の音も少女の耳に届いてきた。それは辺りに響く水音にかき消されていた、少女以外の誰かの心音、荒い息遣い、そしてガサガサという物音だった。
これまで病院という狭い世界以外で過ごした経験がほぼ無かった少女には、今の自分が置かれている状況が予想すら出来ずにいた。もっとも、与えられた情報が余りにも少なすぎて、余程諭い人間でない限り少女の現状を把握する事は出来ないだろう。

（どうしよう…とりあえず、何も分からないのは恐いから、このまま顔は出していよう。身体は…自分では殆んど動かせないから、このまま任せるしかないかな。…うぅ、何か頭が重くなってきた…）

また意識が落ちてしまうのか、そう少女が考えていると、突然身体を押さえ付けていた力が一層強くなり、それと同時に別の力が全身に掛かってきた。

（と、止まった！！…あ、あれ？何で止まったって思うんだろ…でも反射的にそう思っちゃった。…じゃあ、今まで誰かと一緒に移動してたって事になるのかな？）

考えるだけ無駄だと分かっていても、現状が理解出来ない恐怖からか、少女はともすれば落ちそうになる意識を奮い立たせて、状況把握を続けようとしてしまう。
そんな少女の思考を遮ったのは、耳に響く大きな音だった。

「ξτ、¢∂φэϑζ§…！！」

（う、煩いっ！！…あれ、今の人の声だったな。でも何言ってるのか、何にも分からないや…）

「Дζσλ£…бдψνΩйю゛δ」

（さっきのとは違う声…あぁ、駄目っ！！頭の中に響いて痛いっ…！！何にも考えられない…）

前方と腕の中の包みにばかり意識を割いていたせいで、女性はギリギリまで追っ手の襲撃に気付く事は出来なかった。それでも間一髪の所で投げつけられたクナイを避け、ただ一目散に走り続ける。程なくして、目の前の森が開けて彼女はそこで立ち止まった。女性的の後ろには追っ手がいるであろう深い森、そして前方には切り立った崖。山の頂上近くに位置しているその崖は余りにも高く鋭い。どんなに鍛えた人間でもここから落ちたら、ひとたまりもない事だろうという場所だった。そんな危機的状況に置いても、何故か女性の表情はとても安らかで、まるで大きな事を成し遂げたように満足そうな笑みを浮かべている。

それから直ぐに、女性の背後へ音もなく何人もの人影が現れる。鍛えられた体躯をしたその人間達は、一様に黒ずくめの格好をしており、揃って鳥の頭を象った面で顔を覆っていた。一瞬遅れて追っ手の方に向き直った女性の顔からは、既に先程までの笑みは消えている。

「くっ…追い付かれたか…！！」

「もう諦めろ…観念して子供を渡せ」

苦し気な声で叫ぶ女性に、追っ手の一人が辺りに響く声で言葉を返す。

だが、女性はその言葉に従わずに、じりじりと崖に向かって後退ってゆく。

その様子を見た追っ手達は、軽い目配せを交わしてから彼女の確保に動こうとする。

しかし次の瞬間、ゆっくりと後退っていた筈の女性は急にその身体を反転させ、全力で崖に向かって走り出した。

血迷っているとしか考えられない女性の予想外の行動に、追っ手達は驚きを顕にしてしまう。駆け出した足を止めようと、咄嗟に何本ものクナイが彼女の背に向けて放たれる。

「っつ…！！」

クナイが自分の背に刺さる感覚に耐えながら、女性は腕の中の包みを赤子ごと崖に放り出した。

その様子を見た追っ手達が、慌てて崖へと駆け寄るが、到底間に合う訳がなかった。

少女が頭の中に響く大きな音に必死に耐えていると、また外から強い力が全身に加わり、身体が激しく揺さぶられた。

（っつ！！やだ、もう一体何なの！？もう止めてよっ…）

自分ではどうしようもない事態に、少女はただただ耐えるしかなかった。

そうしていると突然、自分の顔に向けて何かが降ってきた感覚がした。

（え、何…？これは…水？）

謎の液体で少女の顔が濡れた瞬間、それまでいくら試しても駄目だった彼女の瞳が突然開いた。

その途端、ぼやけた視界に飛び込んで来たのは、涙を流したまま優しく微笑む女性の顔だった。

（えっ…？）

少女に目の前の状況を把握する暇はなかった。直ぐに視界は一面空色に彩られ、同時に不思議な感覚が身体を襲う。

（な、何か…前に一度、階段から落ちた時の感覚に似てる…？…って事は私、どこかから落ちてるっていうの…！！？）

空中へと放たれた包みは、誰にも止められず落下し続け、崖下に広がる濃い霧の中へ消えていった。

第一話（後書き）

という訳でまだまだ捏造過去が続きます。

本文とは余り関係ありませんが、こういった二次創作での、成り代わりと憑依の違いがイマイチ良く分からなくて困っています。

第二話（前書き）

この話から一層、諸々の捏造・我流設定が強くなりますので、どうか御注意下さい。
一応、憑依先のキャラについての大体の情報が話中に出ています。

第二話

切り立った崖から布の包みごと放り出された少女の遥か下には、樹海とも呼べる様な鬱蒼とした森が広がっていた。

連なる険しい山々の裾に広がるそこは、太古の昔から変わらず其処に自生してきたかのように、人手の入った気配のない原生林の森だった。

この森に人手が全く入っていないのには、いくつかの理由があった。まず、凶暴な動物が多く生息し、毒性を持つ植物も多い事。また、複雑な地形を描くせいで足元が非常に不安定で、同時に特徴が余りない同じような風景が延々と続き、非常に迷い込み易い事。そして、その岩々に特殊な鉱物が多く含まれている為、方位感覚を狂わされてしまう事などだ。然程実りの多い森ではない上に、森を抜ける事が別の場所への近道になる訳でもない。寧ろ不用意に立ち入ってしまうと、動植物の被害にあったり、道に迷って帰って来れなくなってしまう。

この様な理由から、人里からそれほど離れてはいないのにいつしかこの森は人々から疎まれ、“不可侵の森”となっていた。

そして勿論、森へ向けてまっ逆さまに落下している少女が、そんな事を知っている訳はなかった。

（あぁぁぁ…視界が真っ青って事は、上は空！！で、明らかに階段

落ちた時と同じ浮遊感がするから、私は今落下中って事だよね！？しかも私をくるんでる布みたいな物が、激しくバサバサはためいてるから、これは凄いスピードで落ちてるってなんじゃ…）

仰向けの状態で放り落とされた為に、少女からは頭上の空しか見る事が出来なかった。そのせいか、恐怖心からの異常なテンションで彼女は事態を把握しようと思考をフル回転させる。

（まだ叩き付けられない、って事は相当高い所から落ちたって事だよね！？じゃあ私、また死んじゃうの！？…なんて短い人生だったんだ。こんなに早くまた走馬灯を見る羽目になるとは…なんかもう、泣きたいよ…）

不自由な身体と自分ではどうする事も出来ない現状から、その時、少女は助かる事を諦めてかけていた。

（…もう、神様にでも祈るしかないよ…）

（って、あれ？私が私のまま今生きてる事は、神様みたいな存在がいるって証拠になるのかな…？なら、祈るのも無駄じゃないかもしれないっ！！お願いします、誰か私を助けてっ！！）

今にも崖下に広がる森に叩き付けられようとしている少女は、見出だした一縷の望みに賭けて、一心不乱に祈り続けながら落下していった。

元来個々であり、決して長く生きる事のないその生き物にとっては、恨みや欲といった感情を持ち続ける事が不可能だった。それは強大な力を得て、無限とも言える生命を得てからも同様だった。その生き物を動かすのは、種を繋げるという本能だけ。それが潰えたといって、特別な感情を抱く事もなかった。
けれど、長く器に封じられた事で、その生き物の本質が少しだけ変化した。強制的に行われる違う生き物との共存。違う生き物と共に生きる事で、その生き物は新たな視座を得る事になっていった。
そしてそれは同時に、個としてしか世界を見ていなかったその生き物が、他の生き物を含めた全てを、真実の世界として認識する事にも繋がっていったのだった。

ソレ　はそもそも、同質の者達とは異なる存在だった。
ソレ　は随分永い間、微睡みの中を揺蕩い続けていた。
ソレ　は酷く矮小な器の中に、封じられた…――――――。

永らく慣れた器から離れ別の器へと移されたその生き物は、環境の変化を敏感に感じ取った。新しい器の隅々まで自らの力が馴染むまで不用意に力を振う事はせず、ジッとその器の状態を確かめていたのだ。
以前の器に比べて更に強固な呪が掛けられた新たな器では、自らの力を表出させる事が殆んど出来なくなっている。生き物は力を器に巡らせる過程でその事に気付いた。
しかし生き物はそんな変化も然程重要視せずに、直ぐに新しい器に

興味を無くして再び微睡みへと落ちようとする。

しかし、器の感情が急激に高ぶるのにつれ、自らの力が急速に表出しだした事にその生き物は気付かされる。その力で周囲を探って見ると、新たな器が非常に危険な事態に陥っている事が発覚する。

『…相変わらず、人間の考える事は理解出来ない。これはつまり、死にたくなければ器ごと助けろという事か。…まぁいい、あの人間の願いだ。叶えるとしよう』

『…相変わらず、人間の考える事は理解出来ない。これはつまり、死にたくなければ器ごと助けろという事か。…まぁいい、あの人間の願いだ。叶えるとしよう』

ただひたすら祈り続けていたその時、突如として少女の身体の中に謎の声が響いた。

（ぇ…えぇ！？い、一体何の声！？…それに、今度はちゃんと日本語に聞こえたよ…？）

落下していた身体は空中で急停止し、そのまま少女はグルンと反転させられる。その衝撃で外れた身体をくるんでいた包みを、咄嗟に彼女は少しの力しか入らない手で必死に掴んだ。

そのまま視線を眼下にやれば、目前まで迫っていたのは鋭い枝なりをした背の高い木々だった。そしてその枝や葉の間からは、苔むし

て角張った岩が幾重にも重なった地面も視界に飛び込んでくる。

（た、助かったー！！こんな所に叩き付けられてたら、絶対に私死んでたよー…）

少女は震える身体で、息を大きく吐いた。事態を把握出来ていない間も分からない故の恐怖があったが、自分が陥っていた事態をまざまざと見せつけられるというのにも、何とも言えない恐怖があった。

（で。私って今、どういう状況なのかな…。どうやって助かったんだろう。それに、さっき身体の中から聞こえた声って一体…）

いざ事が落ち着くと、少女の思考を占めるのは疑問だらけだった。彼女が目の届く範囲を見回して新たに分かった事は、自分の身体が赤子の様に小さい事と、身体が宙に浮いている事だけだった。それからするに、少女の命が助かった理由は目の届かない場所、つまり彼女の背にある可能性が高かった。

（誰かに抱えられてるのは分かってたから、身体が赤ちゃんらしい事はいいとして…。一体、見えない所はどうなっているの！？……あ。何か、動き出した…）

森の上を滑る様にして、少女の身体は宙を移動し始めた。それを彼女は自分の意志ではどうする事も出来ず、ただ事の起こるままに身を任せるしかなかった。

深い霧が覆う薄暗い森の上空を、何とも奇妙な生き物が飛んでいる。それは人間の赤子の姿をしながら、腰骨から大きな六枚羽根を生やしていた。その羽根は昆虫の羽根のようでありながら、同時に植物の葉にも見える。そして、尾骨の辺りからも角の様な一本の長い尾を生やしていた。

第二話（後書き）

話中に出てきた生き物の生態・封印などについては、かなり独自解釈を行っています。原作設定との間違いがあれば御指摘下さい。話の進行がとてもスローペースなので、次でようやく生き物との対話です。

第三話（前書き）

ＮＡＲＵＴＯ公式イラスト集を探していた為に、投稿が大幅に遅れました。見切り発車で誠に申し訳ありません。
また、公式イラスト集を受けて第二話の文章の一部を変更してあります。

第三話

少女はただ只、眼下に広がる景色を興味深げに眺めていた。
幼すぎる所為で自由の利かない自分の身体では、現状をどうする事も出来ない。結局、事態の進むままに身を任せる他には、彼女の出来る事はなかったのだ。そして何より、少女自身がこの状況をとても楽しんでいた。

（病室の窓から見てたのとは違う樹…針葉樹って言うんだっけ？葉っぱが凄い尖ってるなぁ、触ったら痛いのかな？こんな風に、真上から森を見る機会なんてもうないかもしれないから、しっかり目に焼き付けておこう）

病院から殆ど外に出た経験がなかった少女には、目に映るもの全てが新鮮だった。写真や書籍を介してしか知らなかった事が、すぐ手の届く範囲に実在する。その事実に彼女は気持ちが高ぶり、興奮さえも覚えていた。
眼下に向けて手を伸ばす勇気はなかったが、食い入るように森に目を凝らし、霧を含んだ冷たい風を肌で感じる。
特異な育ち故に、少女は物事をあまり深く思い悩まない性質だった。今ある現実をそのまま真っ直ぐ受け止め、自分の出来る限り精一杯の事をする。これまでの人生をそうして過ごしてきた彼女は、諸々の疑問に悩む事を放棄して自分の中のもうひとつの存在に全てを委ねていた。
決して悪い様にはならない、何故かそう確信しながら。

目的もなく森の上空を彷徨っているかの様に感じられたが、少女の身体はある明確な目的を持って飛び続けていた。その事に彼女が気付いたのは、視界の悪さに目が慣れ、木々を越えて森の地表を確認出来るようになってからだった。

（川に沿って飛んでるんだ）

深い森の奥を流れる小さな小川。少女の身体は、その小川を上流に向けて辿るように飛んでいた。

やがてずっと同じような風景が続いていた森の中に、それまでとは異なる場所が現れた。其処だけぽっかりと木々が無くなっている変りに、小さな泉が湧き立ち、その周囲を丈の短い野草が囲むように生い茂っている。少女がその場所の存在に気付くと、ほぼ同時に身体が地表に向けて緩やかに下降し始めた。どうやら、泉の近くに降りようとしているらしい。

少女に配慮しているかのように身体はゆっくりと下に降ろされ、柔らかそうな草の部分を選んで地面に寝転がされた。そして腰骨の辺りの違和感も徐々に消えていった。

（あ…結局、どうなってるのか見えなかったな）

自分の身体が地に着いている事に安堵する一方、少女は自身が空を飛べていた理由を知る事が出来ず残念に感じていた。

そして、彼女がこれからどうするべきか考えようとしていると、また唐突に身体の内側から声が響いた。

『とりあえずは水があれば大丈夫だろう。…しかし、こんな弱い器ではどうしたらいいか見当もつかんな』

（うわっ、また声が聞こえた！！）

疑問に思う事が多すぎて、うっかり少女は自分の中から聞こえる声について失念していた。しかし、彼女の動揺は謎の声の主には伝わっていないようで、謎の声は思念を続ける。

『器が望まぬ限り、我等は力を揮えぬようだ。まぁ、生命の危険を感じれば自然と気が高ぶるだろう』

（…えーっと。こんなに私が色々思っててても、何にも感じないのかな？うーん……このままにしておくのもなぁ。何なのか分からなくて怖いし、どうにか話をしてみるべきかなぁ？……よしっ、話しかけよう！！）

一体どういう存在なのか見当もつかないが、自身にとっては生命の恩人である声の主に対して、少女は意思の伝達を図ろうとする。

「あー、あぅーあー《あのー、すみません》」

少女の決意も空しく、彼女の口から出たのは意図したのとは違う意味不明な音の羅列。身体が幼すぎて声帯が発達しておらず、彼女の望んだ意味を持つ言葉を発する事は出来なかった。一大決心した分その空回りが恥ずかしく、少女は瞬時に赤面する。

けれど、彼女の行動は決して無駄ではなかった。

『何か器が鳴いているな。声を発する気力があるようだ』

思いのほか大きく響いた声の所為で、それまで独り思念を巡らすだけで少女を気にする様子がなかった声の主が、彼女の事を意識しだしたようだった。

（は、恥ずかしがってる場合じゃない。何とか私の意思があるってことだけでも分かってもらわないと！よし、もう一回！！）

「あーぅああ、うあぁあああぁ《すいません、聞こえますか？！》」

少女がもう一度、必死で意思を伝えようと声を発する。今度はそれを見守っていたらしい声の主が、ふと何かに気付いたようだった。

『音に気を取られていたが、何か思念のようなものも感じたな。…何か話そうとしているのか？』

「あ、あ《うんうん》」

自分の懸命な思いが何かを感じさせているらしい、声の主の反応でそう確信した少女は咄嗟に肯定の意を表すように頷いていた。そうしてまた、相手が目の前にいる訳でもないのにも関わらず、意図しない行動をしてしまった事に恥ずかしくなる。

『今度は然りと聞こえた。お前は自らの意思がある上に、我等と話をしようとしている。そうだな？』

声の主も少女と意思疎通を成立させようとしているらしい。今まで以上にはっきりと響く音で、彼女の中で声が響く。

「あああぁ、あうあああぁーあぁー《そうです、話がしたいです》」

『…話すには鳴き声が邪魔だな。思念だけに出来ないのか？』

自身の発する言葉が意味を成していなくとも、相手との会話が成

立している事に少女は声の主からの言葉で気付かされる。どうやら彼女自身に相手と会話しようという意思があれば、頭で考えるだけで思念として伝わるらしい。それを理解した彼女は口を開かずに、思念のみで会話しようとしてみる。

《えーっと、これで大丈夫ですか？聞こえますか？》

『あぁ、大丈夫だ。…意思の疎通が出来ている事実に驚きだが』

どうやら十分に少女の思念は相手へ通じているようだ。実体があるかどうかも分からない相手に対して、こんな方法で会話が出来るなどと思ってもいなかった彼女も、声の主と同じように感じていた。

《私も会話出来るのにビックリしてます。普通なら赤ちゃんはこんな事出来ないけど、私の意思があってよかった…》

自分の意思がなかったらお互いに困ってしまっていただろう、そう彼女は考えて思わず安堵の気持ちを思念へと吐露していた。

その、少女自身の置かれている状況を漏らしたとも言える言葉に、声の主が敏感に反応する。

『我等は人間の事についてあまり詳しくないのだが、その‘赤ちゃん’というのは今のお前の身体の生育具合の事か？だとしたらお前が今、こうして意思を持っているのは特異な事だと言うのか？』

声の主から返されたのは、少女自身も不思議に思っていた事の一部を的確に突く質問だった。

《絶対とは言い切れないけど、異常な事だと思います。と言うか貴方の存在も含めて、私も分からない事ばかりの状況なんです…》

無事に会話が成立しても、本当の意味での状況把握まではまだ程遠いようだ。どうやら前の人生も含めて、自分の悉くを話さなければならないだろうと少女は感じていた。声の主にそれが可能かどうかは分からないが。

認識は相手も同様のようで、同じ考えの思念が伝えられてくる。

『どうやら、ひとつずつ整理していくしかないようだな。そうする事でしか互いにどうするべきか考えられないだろう。お前もそれでいいか？』

《はい、私の事を話すのは問題ないです。でも…》

『何だ』

思念での会話を続けながら、その一方で考えていた事を少女は意見として出してみる事にする。頭の隅で彼女がずっと感じていたことだが、この提案が受け入れられるかどうかが、彼女自身の効率に深く関わってくるのだった。

《あの…存在のよく分からない相手に対して話するのって何か大変で…。さっき飛んでる時に、貴方の意思で私の背中に何か出してましたよね？あんな感じで、私の前に実体として現れて貰える事は出来ないんですか？》

存在のあやふやな相手と会話しているという事が、独り言をしているようで心情的に空しいし、何より不確かな対象に思念を飛ばす事が思いの外難しいのだ。先程から続く様々な事態によって、精神的に少し疲れを感じてしまっている少女は、これから続行する話し合いを円滑に進めるために、出来る事なら相手に要望を聞いて欲し

かった。
　そんな少女の素直な要望に、声の主が戸惑ったかのように突如、思念が止まる。しかし直ぐに、彼女の側を探るかのような声色で思念が返された。
『精神世界でならば、相対する事は可能だが……お前の精神は強靭か？』
　声の主からの真剣な言葉の意味が分からず、少女はきょとんとしてしまう。
《…貴方の見た目が、途轍もなく恐ろしかったりするって事ですか？》
『どう思うかは人それぞれだろうが、禍々しい気を感じる事は否めないだろう。問題が起きないように、我等が姿を見ない事に越した事はない』
　声の主の客観的な意見を聞き、少女は少し考える。
《精神的にはかなり強い方だと思います。どんな姿であれ、取り乱しはしない、かな…多分》
『ほう…』
《これでも、綺麗なものばかり見て生きてきた訳じゃありませんし。…何より色々忠告されても、私自身が助けてくれた貴方の姿を見たい、とそう望んでいるんです》
　声の主の姿を見たいと考えた初めの切っ掛けは適当なものだった

が、何時しか少女は心から相手と相見える事を望んでいた。そんな彼女の真摯な気持ちが、思念を通じて相手にも伝わったらしい。仕方ない、と言ったかの様な声色で相手は彼女の思いにこう返答した。

『そう言うのならば、引き入れよう。我等が精神世界へ』

そう少女の身体の中に声が響くと同時に、彼女の意識は暗転した。

一瞬の後、少女の前に存在していたのは不可思議な形態をした巨大な生き物だった。

それは少女が幼子である事を考慮に入れても、人間と対比するとその体躯はあまりにも強大だ。

本体とでも言い表わせばいいのだろうか。体躯の中央の部分には、カブトムシに似た甲虫の外骨格に西洋鎧を加えた様な頭部と胸部がある。六本ある手足は人間のように肩の位置から生え、胸部の下に続く腹部は植物の蕾のような様相をしている。　そして、生き物を大きく感じさせる最大の要因は、左右に大きく広がった六枚の羽根だろう。胴体の下から生えた羽根は形やその広がり方、更に下に垂れる尾によって、生き物が巨大な落葉広葉樹の葉を背負っているかのような印象を見る者に与えるだろう。植物の葉脈が合わさったような風体をした昆虫の羽根は、羽根先が橙でそこから根元にいく程黄のグラデーションとなっていて、植物の蕾の様な生き物の下腹部と合わさっている。

植物の葉と昆虫とが融合したような姿を持つ摩訶不思議な、それでいて巨大な生き物。

それが放つ強い気を肌でヒシヒシと感じながらも、少女は恐怖する事もなくただその存在に呆気に取られていた。
彼女の内心を知ってか知らずか、それまでと変わらない様子で声の主である生き物は、少女に思念を飛ばした。

『精神世界へようこそ、我等が器。我等は世界で、尾獣と呼ばれている者の内の一体だ』

第三話（後書き）

読んでいただき、どうも有難うございました。
生き物の思念が説明臭くてすみません。一応、思念＝思考という自分なりの設定があるのですが…（汗）
次回以降、まだまだ続く対話の中でその辺りも説明したいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5680n/

忍界の蟲愛づる少女

2010年10月15日13時31分発行